

# 春燈

4月号  
*April 2018*



主宰の句

安立公彦

暗闇に隠るる鬼へ豆打たず

触るる手に幹颯々と寒明くる

『七線譜』 『鶴翼』 大地春兆す (祝)

眉目愛しき少女の祈り針供養

鷹化して異国の鳩となる日暮



成瀬櫻桃子の句

天高し仰ぎて泪こらへけり

『風色』昭和四十八年

「子を施設に送る」の前書あり。昭和四十年に娘の美菜子さんが知的障害者更正施設「素心学院」（神奈川県大磯町）に入院。十歳であった。澄み渡る空が愛娘の純粹無垢の精神性と通い合い、「こらへけり」で娘を送る父なる櫻桃子の哀しみが切々と伝わってくる。櫻桃子俳句には「泪」や「涙」の措辞が多くへさみだれも泪もH<sub>2</sub>Oなり、ように多様な「なみだ」の表現がある。

鈴木直充

成瀬櫻桃子の句

# 夕焼山羊精薄児らに愛さるる

『風色』昭和四十八年

大磯にある養護施設、素心学院の空は夕焼けに染まっている。山羊の真つ白な毛も次第にピンク色に変わっていく。学院の子供達は山羊が大好きだ。いつせいに駆け寄り、撫でたりさわったり、話しかけたり、嬉しくてたまらない様子。無心な山羊と、生まれたままの純真な心を持つ子供達との交情は、見る者の心まで浄化させる。聖母子像を見るような安らぎと救済が伝わってくる。

竹内慶子

# 燈下集



○ 片桐てい女

みちのくを目指す初荷へ挙手の礼  
鷹舞ふや湖辺に神の産屋の史  
何時の世も勝者が正義吉書揚げ  
ポケットの中の拳骨枯野行く  
しばれるや人傷付けて傷付いて

○ 西川保子

初旅のはじめや大河ひとつ越え  
木杓子の木目くつきり齋粥  
月光を捉へてゐたり大氷柱  
いま恃むもの冬芽のほかにあらざりし  
佐保姫を待つさざなみの淡海かな

○ 加藤千春

己が髪ことさらに愛づ初鏡  
初みくじの吉を賜はる美容院

今年切りと決めて今年も賀状書く

節分や丹波大江の鬼洒脱

一族の眠る裏山笹子鳴く

○ 鈴木榮子

仔猫生る赤子の手つきに手をしやぶり

寒もどり何時まで覚えぬ乗換駅

節分や早口科白を子に教へ

針供養針を数へて母仕舞ふ

父の残しし白金懷炉磨きけり

○ 中澤 弘

寒晴やぐしの崩れし家の鈴

猫舌の猫背饒舌根深汁

頑の跨ぐ踏絵や風見鶏

臘梅やひんやり肩の貼湿布

佐助に隠れて幼もういいよ

○ 篠原 幸子

櫛やゆづるべき名も子も持たず

善し悪しの紙一重なる寒さかな

胸奥に一本の棒もがり笛

探梅や笑みを交はしつ知らぬどち

頬なづる風のいろいろ春浅し

○ 藤原 若菜

初夢に詰襟のひと立たまほし

アンデスの塩のうす紅七日粥

大寒のエレベーターの軋みかな

雀来て鶉来て日脚伸びにけり

春の虹立つあたりより染湧ける(祝・田嶋洋子様)

○ 市川 玲子

書初や白寿の翁のひといきに

読初や心に住める一書あり

紅顔たりし恩師の面輪初夢に

江ノ島や浪の間に間に虎落笛

明日は別れのふるさとの爛熟うせり

○ 大文字 孝一

真向かひに富士を据ゑたる初座敷

御降りに老松色を深めけり

父の遺す机大きく読始

親子三代変はらぬ味の雑煮かな

大願成就の御礼参りや梅ひらく

○ 和田 絢子

針穴に辛うじて糸一葉忌

舩ひ解かれおぼつかなくも鶴の妻

枯れてなほ岩をはなさず鳶一縷

俎板を干して冬日を裏返す

枯野仏念珠は赤き実となせり

# 当月集

安立 公彦選



○ 新海 英二

初湯殿八十路の鼓動つつがなく

ときめきのなほあまたあり寒卵

笹鳴や日の当たりをる妻の墓

母の声聞きたき日なり二月寒

きさらぎや警策確と坐禅会

○ 西岡 啓子

笹鳴や山坂へ息ととのふる

枝移る鳥きはやかに日脚伸ぶ

春待つや少年の像脚を組み

動かねば土にまぎるる寒雀

石棺に日差のとどく春隣

○ 川崎 真樹子

立春や心とふ字の笑まひたる

生くるにも加速度のあり雪解川

暖かや機械に通帳吸ひ込ませ

譲らるる席に雨水の温みかな

壇上の礼ぎくしやくと卒業す

○ 小山 繁子

無限なる十七音や冬銀河

臘梅の透けるいろなる情のいろ

日の池に動かざるまま寒の鯉

寒柝のなかのかけ声かの人か

還暦の立志やさらに初不動

○ 神田 恵琳

淡雪や黒竹の黒きはやかに

天翔る一羽の鷹や海しづか

一月の松籟かすか焼団子

久女忌の氷る湖面に真向かへり

花街の雪しぐれなる別れかな

# 春燈の句

安立 公彦選

ドナルド・キーン日本を語る淑気かな

神奈川 山下 健治

北窓を開く机上の原稿紙

光則寺山門に在る名残雪

五分咲きの臘梅の空碧きかな

水縹の空いつぱいに春立てり

立春の筆なめらかに走りけり

墨の香にとつぷりつかる日永かな

行間のゆるみ気になる春の雪

あれこれと願ひの数や初詣

畳紙大きく広げ春小袖

さまざまの拍手響く初詣

地下鉄の隣席受験生なるや

見下ろせる川面や消ゆる春の雪

夫に供へわれも一つや桜餅

東京 石原 節子

ふらここや少女らの声高階に

梅の香や吹かるるままに六地藏

小止みなく舞ふ初雪や魅せらるる

師を偲ぶ縁となりし椿かな

節分や鬼も仲間か独り住み

山茱萸の蕾黄色に庭の隅

今を生くる米寿樂しき初湯かな

船橋の旋回窓や雪霏々と

船ごとに松飾らるる船だまり

花は咲く米寿の我は何残す

二羽睦み三羽争ふ寒雀

水漬を拭くや猫の眼こちら向く

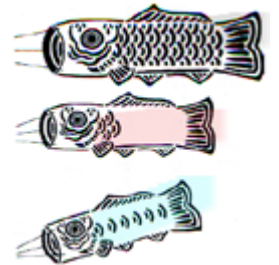
南天の実を包むかに日の暮るる

静かなる死を賞づる如大根抜く

千葉 金森 涼

埼玉 原田たづ糸

長崎 増田 菖波





# 余言

安立公彦

る」を「食べれる」とする語など。しかし最近では普通の会話の中によく出ているようだ。

「華語」は台湾における国語。「華語の若者語」が如何なるものか、華語を全く解しない評者には手掛りもない。しかし一読、「華語には華語の若者語」にこめられた作者の嘆きは感得される。観念的な言い方だが、それは時代の風潮というものか。納得のゆく作品だ。

佐保姫を待つささなみの淡海かな

西川 保子

「佐保姫」は周知の通り春をつかさどる女神。秋をつかさどる竜田姫と対をなす。季語の分類としては天文に区分される。「竜天に登る」や「蛙の目借時」は時候。何れもイメージの膨らむ季語だ。俳諧の妙と言うべきか。

この句、その佐保姫を、「ささなみの淡海」が待つと表現する。佐保姫がみごと甦り、女神の羽織るガウンが淡海をおおやかに羽撃つさままで見えてくる。佐保姫は淡海にこそふさわしい。尚、このような美体のない季語は、季語を支えるきつちりとした言葉があつて初めて生かされる。

鋤焼や華語には華語の若者語

廖 運藩

「若者語」といえば「ら抜き言葉」を思い出す。「食べられ

昂然と首を擡ぐる枯尾花

呂 秀文

歳時記で「枯尾花」の例句を見ると、大方は負のイメージを持つ。それは野口雨情作詞、「おれは川原の枯れすすき」の唄の影響も幾らかあるのだろう。或いは「枯」という字の持つ「うらぶれ」の思いも作用しているのか。

この句、一転して「昂然と首を擡ぐる」枯芒だ。季語をどう捉えるか、それは全く作者の姿勢に委ねられる。この句を見ていると、抽んでた一本の枯尾花が折からの夕日を受けて屹立している姿を思う。紛れもない枯尾花の真実だ。

春著きてわらんべに席ゆづらるる

竹内 慶子

多分新年大会に赴く車中の一事だろう。評者の知る限り作者は新年大会には和服で来る。正月も七日を過ぎると、世間は常の生活に戻る。それでも中旬頃までの休日、街には新年

の気分が多分に残っている。

車中、立っている作者に、前に坐る幼子が、「おぼちゃん替ってあげる」と席を立つ。それは作者にとつては嬉しきより戸惑いの方が強かつただろう。しかしそういう時は素直に坐るべきだ。この「わらんべ」の何と利発な愛らしさよ。これも「春著」の功用の一つか。

揺るぎなき地軸を願ふ初菰

宮沢 治子

「揺るぎなき地軸」がいい。諸本によると、地球自転の回転軸は約二三、五度傾斜しているという。私たちはその地軸の傾斜を自然のものとして、生れ育ち、そして死んでゆく。この傾斜がわずかでも狂った時地球はどうなるか。その答には取越し苦勞の言葉が返ってくる。

しかし、と作者は思う。近年の世界に起こるあれこれ事を思うと、初詣の折まず祈念すべきは大地の安定、即ち揺るぎなき地軸ではなからうかと。評者も全く同じ思いだ。

組を干して冬日を裏返す

和田 絢子

水仕の組を天日に干すのは、消毒の一法だ。この「組」は化学製品などではなく、厚い真檜の板だろう。組を干すという何気ない所作に作者の人の柄が窺える。

その組を裏返す作者。全く普通の家事である。しかし作者はそれを「冬日を裏返す」と表現する。言われてみるとその

通りだ。「組に当たつていた冬日」の省略である。読み手の意表をつく奇抜さも併せ持つている。

語数に制約のある俳句だ、それを補う省略の大切さを、改めて考えさせる作品である。

ときめきのなほあまたあり寒卯

新海 英二

同時発表の句に、〈笹鳴や日の当たりをる妻の墓へきさらぎや警策確と坐禅会〉の句がある。今は亡き妻の墓前で、折からの笹鳴のこえを亡き妻と聴きいる作者。また禅寺で坐禅に集中する作者。何れも表現に無駄がない。

掲出句、「ときめき」とあると恋情を思う。この句はしかし、「なほあまたあり」に作者の姿勢の勁さを思う。恋情もその一つだろうが、作者のこころ躍りは恋情にとどまらない。「寒卯」の据りがいい。

笹鳴や山坂へ息ととのふる

西岡 啓子

掲出句、例えば切通しなど歩いていると、左右の木立で笹鳴が鳴き交わす。それを聞きながら静かに息を整えている作者。情景が巧まず読み手に伝わる。読み手はそこからその一句の世界を自らの世界として鑑賞する。写生句の大きな力である。そしてこの句は写生の良く効いた句だ。

同時発表の他の句も、表現は穏やかだが、対象をしつかりと見据えている。〈動かかねば上にまぎる寒雀〉。